

経 済 情 勢

国 内

輸出の持直しや製品在庫調整の進捗を背景に生産は回復の兆しをみせているが、国内最終需要は全体として伸び悩んでいる。大企業の設備投資は弱含みとなっており、中小企業の設備投資も依然低迷している。また、住宅投資は引続き低水準にとどまっており、公共事業契約額も5月には再び前年水準を下回った。この間、個人消費関連では、百貨店売上げは中元商戦の出足がやや鈍いなど依然伸び悩んでいる。一方耐久消費財の売行きは、一部家電製品は引続き順調であるが、エアコンなど季節商品の売行きは盛上りを欠いている。

6月の商品市況をみると、鉄鋼、繊維が輸出の好調や在庫調整の進捗から続伸したが、石油製品や建材が続落したほか、非鉄も小反落するなど、総じてみれば弱保合いとなった。一方、6月の卸売物価は、為替円安の影響から輸出物価ならびに輸入物価が上昇したため、総合では4ヵ月振りに上昇した。この間、消費者物価(東京)は、生鮮食品の大幅反落を主因にかなり低下した。

金融面をみると、5月のマネーサプライの前年比伸び率はほぼ前月並みとなり、銀行貸出約定平均金利も前月比ほぼ横ばいとなった。この間、6月の公社債市況は、月中を通じてやや強含みに推移した。

5月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)が引続き大幅な黒字となったうえ、長期資本収支の赤字幅も小幅にとどまったため、総合収支は大幅黒字となった。6月の円相場(対米ドル直物相場)は、米ドル金利の上昇などから弱含みで推移し、月中では小幅円安となった。

生産、出荷は下げ止まり

5月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)は+0.3%、同出荷は横ばいとなり(前月はそれぞれ-0.2%、-0.6%)、最近の動きをならしてみればともになげ止まり傾向を示している(前年比はそれぞれ+2.3%、+1.7%)。

* 以下増減率は特に断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別動向をみると、資本財輸送機械(トラック、船舶)が生産、出荷とも

前月に続き減少したほか、耐久消費財(二輪自動車)の生産も減少、また非耐久消費財の出荷も減少したが、生産財(冷延帯鋼、通信電子部品、化学繊維)の出荷が増加を続けたのをはじめ、一般資本財(事務用機器、電子計算機)、建設財は前月減少の反動もあって生産、出荷とも増加した。

この間、生産者製品在庫(速報)は、乗用車が車検期間延長(7月登録分より実施)後の需要反動増を見越して積増されたことなどから+0.6%と4ヵ月振りに増加したが、調整が比較的遅れていた鉄鋼、繊維などでは引続き減少した。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、5月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は、前月減少のあと+7.7%の増加となった。また建設工事受注額(民間分、速報)は、前月著減のあと+30.5%と大幅に増加したが依然低水準にとどまっている(前年比-9.2%)。

5月の公共事業契約額(前年比)は、-11.9%と再びかなりの減少となった(前月+3.2%)。

5月の住宅着工戸数(前年比、速報)は、公庫融資分の着工一巡が引続き影響して-11.2%と3ヵ月連続して前年を下回った。

個人消費関係では、5月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、夏物衣料の順調な売行きから+2.1%と前月に続き幾分持直した(前月+2.1%)が、6月入り後の都内百貨店売上高は、中元商戦の出足がやや鈍いことや月央以降の天候不順もあって不冴えに推移した。6月の耐久消費財の売行きをみると、VTRや電子レンジが順調な売行きを続けているが、エアコンなど季節商品は盛上りを欠いている。この間、6月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は、車検期間の延長を控えての買控えや登録申請のずれ込みが影響して-19.2%と大幅に減少した。

5月の雇用動向をみると、常用雇用が-0.2%と再び減少したほか、有効求人倍率も0.57倍と幾分低下し(前月0.60倍)、完全失業率は2.68%とほぼ前月(2.69%)並みの水準となった。

卸売物価は為替円安から4ヵ月振りに上昇

6月の商品市況をみると、鉄鋼(棒鋼)、繊維が輸出の好調や在庫調整の進捗から続伸したものの、石油製品(C重油、灯油)が続落したほか、建材が実需不振から引続き低下、また非鉄も海外相場の頭打ちから小反落するなど、総じてみれば弱保合いとなった。

6月の卸売物価は、国内物価が保合いで推移したものの、輸出物価ならびに輸

入物価が為替円安を主因に上昇したため、総合では+0.3%と4か月振りに上昇した(前年比-2.0%)。

6月の消費者物価(東京、速報)は、生鮮食品が大幅反落をみたうえ、被服も小幅ながら値下りしたことなどから-0.7%と下落し、前年比も+1.9%と低下した(前月同+2.8%)。

マネーサプライは安定した伸び

6月の金融市場をみると、銀行券は9,032億円の発行超(前年同8,715億円)となり、月中平均発行残高(前年比)は+5.1%とほぼ前月(+5.2%)並みとなった。一方、財政資金は、一般財政の払超幅が前年比拡大したものの、国債発行額が超長期債の発行もあって前年を大幅に上回ったことなどから、全体では12,927億円の揚超と前年(同7,210億円)を大きく上回る揚超となった。このため、月中の資金不足額は22,075億円と前年(16,173億円)を大幅に上回り、日本銀行は貸出の実行、売出手形の決済、政府短期証券の償還、さらには債券買オペの再開によって不足資金を供給した。

この間、コールレート(無条件物)は、上記のような資金不足地合を背景に強含みに推移し、月中0.1875%上昇して6.25%で越月した。手形レート(2か月物)も、わずかながら上昇した(月中+0.0625%、月末6.625%)。

5月のマネーサプライ($M_2 + CD$ 平残、前年比)は+7.5%とほぼ前月(+7.6%)並みの伸びとなった。この間、5月の銀行貸出約定平均金利(都銀・地銀・相銀平均)は、短期、長期とも引続き低下したが、金利割高の長期貸出の比率が上昇したことから-0.001%とほぼ横ばいの動きとなった(月末水準7.127%)。

6月の公社債市況をみると、都地銀等が貸出不振を映じて手持ち証券の売却を控える動きがみられたことなどから、月中を通じてやや強含みに推移した。もっとも、新発国債の応募者利回りは流通利回りをなお下回っており、7月のシ団引受国債の休債が決定した。この間、株式市況は、上旬中は弱含みに推移したが、中旬以降、ニューヨーク株価の反発や企業業績回復期待の強まりを背景に急伸した(東証株価指数月末656.13、月中+19.29)。

経常収支は引続き大幅な黒字

5月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、貿易外収支の赤字幅が増大したものの、貿易収支の黒字幅がさらに拡大したことから、23.0億ドルの黒字と引続き大幅な黒字となった(前月同23.2億ドル)。一方、長期資本収支は、本邦資本が引続き高水準の流出超となったが、外国資本が大幅な流入超とな

ったため、0.7億ドルの小幅赤字にとどまった(前月同20.3億ドル)。この結果、総合収支は20.5億ドルの黒字となった(前月は10.6億ドルの赤字)。

5月の輸出(通関、ドルベース)は、-3.4%と3ヵ月振りに減少したが、前年比は+0.5%と前年水準を回復し、また数量ベースでは+2.9%と前月に続き増加した(数量ベース前年比+8.7%)。品目別(数量ベース)にみると、二輪自動車、テレビなどが減少したが、鉄鋼(中国向け)が前月に続き増加し、合繊糸、船舶も増加した。

5月の輸入(通関、ドルベース)は、-3.6%と前月に続き減少し、数量ベースでも-4.0%となった(数量ベース前年比-4.7%)。品目別(数量ベース)にみると、綿花、羊毛などが増加したが、原油が大幅に減少したほか、非鉄鉱、小麦なども減少した。

なお、6月の輸出および輸入(通関、ドルベース)はそれぞれ+3.0%、+15.2%となった(数量ベースは-1.2%、+14.6%)。

6月の円相場(対米ドル直物相場)は、米ドル金利の上昇などから弱含みで推移し239円80銭で越月した(月中1円20銭の円安)。

(昭和58年7月15日)